

またまた辛口 大相撲テレビ観戦雑記
～平成 26 年初場所を終えて一言～

<1> 予想に反してモンゴル対決

白鵬 28 回目の優勝、ライバル不在かと思いきや、おおかたの予想（期待？）を裏切って優勝決定戦にまでもつれ込む盛り上がりとなった。今場所の白鵬の相撲は、低く安定した腰の構えと、「機を見るに敏」と言う言葉がぴったりするような素早い身のこなしが目立った。

このまま全勝優勝だろうなと思っていたら鶴竜が一敗のままで 14 日目まで突っ走り、千秋楽の土俵を大いに湧かせる結果となった。

多くの相撲ファンもマスコミもテレビの解説者も、初日にはこんな予想は立てなかった。今場所の相撲には「意外な結末」という面白さがあった。

<2> 綱取り綱取りと騒ぐな

稀勢の里の相撲は、いつもの腰高のほかに体の動きが滑らかではなかった。足の指の故障で千秋楽を休場したが、これ以外にもトラブルを持っていたと睨んでいる。「綱取り」と称して周りは騒ぎまくっていたが、本人は「今場所はダメだろうな」とわかっていたのではないかと思う。

鶴竜が 14 勝 1 敗で優勝同点の準優勝となったことで、また新たな「綱取り」騒ぎが始まった。北の湖理事長までが「鶴竜は来場所が綱取りになる」などと発言するのは問題だと思う。大関としての鶴竜の実績を冷静に眺めて見れば、「連続優勝またはそれに準ずる成績」の中の「それに準ずる」という解釈を利用した瞬間最大風速だけで昇進させることの危険性はわかる筈だ。大関在位成績と直前六場所の成績による「昇格推薦基準」の制定が望まれるところである。

<3> 関脇も小結も不安定

関脇在位が一番長く、大関に一番近い関脇として毎場所注目を浴びる豪栄道は、バタバタした相撲が目立ち、勝ち越しするのが精いっぱいという結果だった。千秋楽にようやく勝ち越す程度の力士が大関候補では困ったものだ。

有望視されて幾久しい栃煌山は、相変わらず「上がれば落ちる」の繰り返し、妙義龍は途中休場。

関脇・小結は毎場所入れ替わる状態で、このところ次に繋がる力士の出現は感じられない。

<4> 次は誰だ

前頭上位に進出してはその壁に跳ね返されることを繰り返しながら壁を打ち破る日が来る。跳ね返されながら微妙に力を付けて来ている力士が目立つようになってきた。

松鳳山は前頭 5 枚目以下に下がれば容易に勝ち越せるようになったが、3 枚目以上に上がると跳ね返されることが多かった。今場所は相撲の幅も広がり 9 勝 6 敗の成績。来場所が楽しみである。

勢も同じように挑戦を繰り返しながら力を付けて来ている感じがする。勢の相撲には「型がある強み」と執念深い取り口から、近いうちに壁を打ち破って小結に関脇に上る日が来るだろうと見ている。

<5> その次は誰だ

まだちょん髷も結えないザンバラ髪の遠藤は前頭 10 枚目に躍進、しかも 11 勝 4 敗という好成績で来場所は横綱大関と顔を合わせる地位になる。安定した足腰、柔らかな体、スピード相撲と粘りの相撲の双方を持ち合せている。何よりも基本が身に備わっていることが注目に値する。

大砂嵐はエジプト出身の関取として話題になったが、相撲の基本をあまり身につけない内に上がって来た感じがする。上から覆いかぶさるようにまわしを取って、力まかせに振り回す相撲は把瑠都同様に怪我のもと。

きちんとした四つ身を会得すれば成長の余地はあるが、この先どんな風に育つのだろうか。
千代鳳の若々しい相撲は見ていて気持ちが良い。真面目に力いっぱいやっているなど感じさせる力士としては舂ノ山と双壁と言える。将来有望な力士の一人ではあるが、時間一杯になってもなかなか手を下さない立ち合いは今後改善の必要がある。

<6> 出来事とその対策

今場所は「まわし待った」になる取り組みが続いたが、改善すべき課題が沢山あると感じた。

「まわし待った」の共通点は「時天空と対戦した力士」だった。「時天空が結び目近くのまわしを取った」とと、「相手の力士のまわしの締め付けが不十分」なことが主な原因だった。時天空のまわしの取り方は、モンゴル相撲の名残が常態化しており、勝負の流れの中では結び目を掴んでいることもある。

臥牙丸に代表される「ユルフン」の力士や結び目をきちんと締めていない力士も散見するので、回しの締め方の指導も不足しているのではないかと思う。

行司が「まわし待った」をかけて動きが止まった時は、行司の指示があるまではそのままの姿勢でじっとしていなければならないが、最近見かける事例では殆どの場合両力士が行司からの指示がないのに手を離したり足の位置を変えてしまったりしている。長い取り組みで行われることがある「待った」も含めて、力士や行司への指導が不十分な感じがした。

時間一杯からの「突っかけ」「待った」による仕切り直しを四回も繰り返す取り組みがあった。現在の規則では立ち合い瞬間の「チョンつき」を認めているので解決不可能な課題である。白鵬から遠藤まで、蹲踞から腰を割り両手をつく立ち合いをする力士は沢山いるが、琴奨菊等いつまでも手をつかないチョンつき力士も沢山いる。中には蹲踞の後で腰を割らずに、いきなり立ち合いの動作に入る陸上競技の「スタンディングスタート」のような力士までいる。これでは立ち合いの正常化は図れないので、「立ち合いの正常化」を論ずる前に「立ち合いの標準化」を図る必要があると思う。

遠藤が登場したことで、土俵上に上がった両力士の四股（しこ）が注目されるようになった。呼び出しと行司に呼ばれて土俵に上がったら、まずは「神事」としていくつかの動作をしなければならない。

四股を踏む足が「いやいややっている」ように少ししか足を上げない力士も数多くいるし、チリ手水で大きく開いた両手の掌を反さない内に立ちあがる力士もいる。

土俵上の所作には意味があり、それぞれの所作の後に戦いに入るといふ神事の流れのひとつひとつになっている。外国人力士が数多く入門してきたが、きちんと教育していないのではないかと思う。

以上